

武蔵野日曜聖書講筵

天国

——マタイ伝第5章1～12節——

1995年12月3日

小池辰雄

神の恵み 自分の信仰なんかありません わがうちなるキリストが見えないか 既に天国 自分は何もできない 我は火を投ぜんために キリストは光 聖書ほど楽しい本はない 完全性がそこにあるか キリストの勝利をいただく

【マタイ5】

- 1 イエス群衆を見て、山にのぼり、座し給えば、弟子たち御許にきたる。
- 2 イエスをひらき、教えて言いたもう、
- 3 幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。
- 4 幸福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん。
- 5 幸福なるかな、柔和なる者、その人は地を嗣がらん。
- 6 幸福なるかな、義に飢え渴く者、その人は飽くことを得ん。
- 7 幸福なるかな、憐憫ある者、その人は憐憫を得ん。
- 8 幸福なるかな、心の清き者、その人は神を見ん。
- 9 幸福なるかな、平和ならしむる者、その人は神の子と称えられん。
- 10 幸福なるかな、義のために責められたる者。天国はその人のものなり。
- 11 我がために、人なんじらを罵り、また責め、詐りて各様の悪しきことを言うときは、汝ら幸福なり。 12 喜び喜べ、天にて汝らの報は大なり。汝等より前にありし預言者等をも、斯く責めたりき。

● 神の恵み

「幸福」という言葉はギリシヤ語の「マカリオイ」という言葉ですが、「恵福」ということです。恵みが大事なんです。神さまに恵まれてある。神の恵みにあずからない幸福なんていうものはあやしいわいんです。我々の恵福というのは神の恵みにあずかることです。

私は信仰も何ありません。私はキリストさまに圧倒されて生きているだけのはなしです。自分の信仰がどうだこうだなんて、そんなことは考えません。神の力、恵み、光、生命、これに圧倒されて生きています。実際そうなのだから仕方がない。もし「自分の信仰」なんていうものを問題にするのだしたら、もう信仰なんかやめだ。



今日はマタイ伝5章です。とにかく、キリストの言葉、行為というものはケタがちがう。考えられた言葉ではない。上から来ている力でキリスト自身が圧倒されて告白しておられる。イエス・キリストは「無者」です。何も無いひと、神さまだけが有るひとです。だから、「我を見し者は父を見しなり」と仰った。

「自分は何もできない、何も言えない」

とヨハネ伝に書いてある。だから、我々はキリストの中に自分を投げ込んで、キリストの告白をそのまま我々自身の告白にできるわけです。そういう一如いちによの世界です。キリストと一つになっている世界です。信仰ではない。一つになることです。キリストは父なる神さまと一つになっていた。パウロもそうです。

「わがうちにキリストあり、キリストのうちに我あり」

という一つの世界であって、信じ仰いでいるのではない。一如の世界が本当の世界です。だから、信仰という言葉は使いたくない。

その中に入れられている。それが本当の天国人なんです。自分のうちにキリストをいただと、自分のうちに天国ができてしまう。キリストの中に入ると、そこに天国がある。天国というのは、この地上においてキリストと一つであるところ、それが天国です。だから、我々はこの地上の生涯が終わっても、天国に行かざるを得ない。連れて行ってくださる、引張って行ってくださる、持ち上げてくださる。そういうわけです。だから、死ぬということはない。まさに往生です。往きて生きる。私がいなくなった時に、

「小池先生もとうとう死んだ」

なんて絶対言わないでいただきたい。

「向こう側に行きました。万歳、ハレルヤ！」

と、あなた方は言っていたください。お互いさま、そういう非常に力のある喜ばしい人生です。何がどうなったって一向差し支えない。我々自身がまさに天国人なんです。

●自分の信仰なんかありません

私は無教会会の会員であった時、

「信仰、信仰。信仰をちゃんとしなければダメだ」

と散々言われた。今は、

「私は信仰なんかありません。私は神・キリストの力と生命に圧倒されて生きていくだけの人はなしです。自分の信仰なんてものはありません」

と言います。無なんです、無者なんです。キリストは神さまの無者です。無即無限無量です。自分が空っぽだから、無限無量なものが入ってくる。この部屋は本来空っぽなんだ。ところが、太陽の光と一緒に空気が入っている。空気が満ちている。空気が充満している。



地球そのものが無者です。太陽のエネルギーで、またその存在で地球はグルグル回されている。太陽なくして地球はありえない。太陽は地球にとつて絶対の存在なんだ。我々にとつてはキリストは絶対の救主すくいぬしです。こつちがどうである、こうであるではない。ありがたくて、ただ平伏して、

「ありがとうございます」
と、それだけのなしです。

「私の信仰はまだ本ものでありませんから」
なんて、そんなことは我々はひとつも言う必要がない。随分乱暴なことを言う人だと思いかもしれないが、そうではない。本当にそうなんだ、自分の信仰を問題にしていたのではありません。くだびれてしまう。

「果たして私の信仰は本ものであろうか？」
なんて、冗談じゃない。

「信仰なんかありません。圧倒されて生きていくだけのなしです」
と、それがクリスチャンなんです。仕方がない。それが本当のキリストの者なんですから。

●わがうちなるキリストが見えないか

キリストは、自分は無者で神一切で、

「我を見し者は父を見しなり」
と言われた。

「我を見し者はキリストを見しなり。わがうちなるキリストが見えないか」
と、我々はそう言っているわけでは、あなた方はみなそうです。これが本当の福音なんです。よろこびの音信です。これ以上のよろこびはない。これ以上のありがたいことはない。もう楽でしょうがない。また、力が来てしょうがない。西郷南洲が

「始末におけない者が本ものだ」
と言ったが、本当にそうなんだ。これは始末におけないんだ。

私は教というのは嫌いだ。

「キリスト教とはどういうものだ」
と、分析したって何もでてこない。もし、言うなら「キリスト道」です。我々のはキリスト道で、キリスト教ではありません。「教えがどうだこうだ」なんて、そんなことをゴタゴタ言っている世界ではない。道だから、自分で歩きます。そうすると、そこは天国です。歩いているとそれは天国です。天国を歩いている。地上が既にもう天国である。日常生活が天国である。運命環境がどうなったって、わが天国を誰が奪うことができよう。わがうちなる天国をなにも奪うことができない。

マルチン・ルターの讚美歌の中にそういうのがある。



「敵どもは取らば取れわが生命、
財も誉も子も妻も。

すべてのものを奪い去れ！
彼ら何をか勝ち得んや。

神の国こそ我らには在れ。」

さすがはルターだね。ルターの宗教改革の精神はそういうところにある。宗教的な組織ではない。カトリックは大きな宗教的組織体だ。組織は何も要らん。一人ひとりが本ものか、キリストと一つになっているか、それだけのはなしです。仰いでいるのではない。一つになることです。

キリストは神一切で、

「我を見し者は父を見しなり」

と仰った。あなた方一人ひとりがキリスト一切で、

「我を見し者はキリストを見しなり」

とはつきり言えなくては。

「わがうちなるキリストが見えませんか。見えないなら、あなたの目がおかしいぞ」
と、それくらいな気持ちでいてくださいよ。それが本当のキリストのものということです。クリスチャンというのは本当はそういうものです。

●既に天国

その現実が既に天国なんです。だから、我々は天国人なんです。キリストをいただいて
いる人、キリストを生きている人、キリストと一緒に生きている人、これは天国人です。
どんなに運命環境が、いわゆる不幸であろうと、ちっとも不幸ではない。それは本当の恵
福です。本当の「恵福なるかな」です。

ダンテの恋人にベアトリーチェというのがある。彼女はダンテをどこへ連れていったか。
天国に向かって。最後は天国に連れて行つた。

「永遠に女性的なるもの我らを引き上げ」

とは、ゲーテの『ファウスト』の中の最後の言葉です。「永遠の女性」に引き上げられて天
国に導かれる。

日本の民主主義なんてダメです。リンカーンが

「アンダー ゴッド」(神の下に)

と言っている。日本の民主主義には「神の下に」がない。神の下における民主主義ではない。
神さま無視の民主主義なんてものはとかく自己本位になっている。日本人は今、自己本位
が多い。人を思いやるのが少なくなっている。思いやりがなくなってきた。だから、
日本は精神的に一番あぶない。ドイツやアメリカに行つてごらんさい。どこか違うから。



それは何といても彼らは福音が、聖書が土台になっているからです。

「万巻の書も聖書一巻にかなわない」

とはゲーテが言っている言葉です。ゲーテにしるダンテにしる、向こうの偉大な文学者はみな根底は聖書から来ている。アンデルセンだってそうだ。キルケゴールもそう。アッシジのフランチェスコなんかも素晴らしい人だ。

魂之靈は「たましひ」と訓む。この靈は我々にとっては上から来しているところのキリストの靈です。キリストによって贖われたところの新しき聖靈のことです。我々の魂が聖靈を受ける。

聖霊がマリヤの中にイエスを宿らせた。キリストというのは靈界からやってきた。キリストの種が靈界からやってきて、そしてマリヤの中に入った。キリストは、

「我はアブラハムよりも先にある」

と言った驚くべき存在です。

アブラハムは175歳まで生きただけども、人間は最も自然に生きると、120歳までは普通は生きるそうだね。何も年齢を数える必要はないけれども。我々は終りなき生命なんだ。

「これでお終い」

なんていうところはない。未成交響楽なんだ。

やはり福音の世界には素晴らしいのが出てくる。日本に偉大な文学が出てこないのは、結局そういう根っこがないからです。漱石なんて言ったってたかが知れている。藤村にしたってそうだ。ダンテやゲーテなんかは桁がちがう。ユゴアの『レ・ミゼラブル』、トルストイの『復活』は素晴らしい。

あなた方も人生はキリストにあつて、何ものかに対する復讐戦だというような気持で戦ってください。キリストも言ってるしやる、

「自分は平和をもたらすために来たのではない。争いだ」

と。天国的なものは地的なものや戦う世界だ。キリストは非常に戦闘的なんだ。悪魔と戦って、悪魔なんかやつつけてしまう。

「サタンよ、退け！」

と言った。キリストというのは、言葉の中にももの凄い力があるから、参ってしまうんだ。私はそういうことを瞑想するだけで力が来てありがたくてしょうがない。意味の世界ではない。福音というのは響きの世界、力の世界、光の世界、生命の世界です。これはのほほんとしている天国ではない。戦いとしていくところの、勝利していくところの、勝つていくところの天国です。

●自分は何もできない

マタイ伝5章に入ります。



1 イエス群衆を見て、山にのぼり、座し給えば、弟子たち御許にきたる。

2 イエス口をひらき、教えて言いたもう、

「恵福なるかな、^{さいわい}霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

これはいい言葉だね。「心」は「霊」ということです。「霊が貧しい」とは自分を何もものもしないということ。無者です。これはキリスト自身の告白。彼自身が霊が貧しいんです。

「自分は何もできない、何も言えない。神さまがさせているだけのなした」

と言っているんだから。キリストはそうなんですよ。ヨハネ伝に書いてある。

ヨハネ伝7章16～17節、

「16 イエス答えて言い給う『わが教はわが教に^{おしえ}あらず、我を遣し給いし者の教なり。17 人もし御意を行わんと欲せば、此の教の神よりか、我が己より語るかを知らん。』(ヨハネ7・16～17)」

キリストはまさに神さまの御言をただ伝え、またその業をさせられていた。だから、こちら側の信仰という意識はなにもいらない。あけつばなしで、何もありません。キリストが圧倒して、私を導いたり、語ったり、させたりしているだけのはなしです。なにかクリスチャンは一般にもつたいぶりすぎてしまっている。私はもつたいぶるのは嫌いだ。

3 恵福なるかな、魂の貧しい人——自分を何者ともしない人——天国はその人のものなり。

そこに天国がやってくる。

4 恵福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん。

神さまの慰めがやってくる。

5 恵福なるかな、柔和なる者、その人は地を嗣がん。

力ある者が地をつぐのではない。柔和な人が地をつぐ。

6 恵福なるかな、義に飢え渴く者、その人は飽くことを得ん。

義は必ず向こう側からやってくる。そして満たされる。

7 恵福なるかな、憐憫ある者、その人は憐憫を得ん。

神から、或は隣人を通して神・キリストの憐れみがやってくる。人を憐れみ思いやる、助ける、そういう角度が今の日本人は非常に薄くなった。身勝手、自己本位です。それはちょっと幸福ではない。お互いに行き詰まってしまう。おいしいものがあつたら、「上げますよ」と。自分の方はちょっとでいい。人にたくさんあげる。人が喜ぶのをみて喜ぶのが本当の喜びなんです。

8 恵福なるかな、心の清き者、その人は神を見ん。

雑念がない。何でも見える。神さまが見えてくる。キリストが見えてくる。

「神を見し者なし。ただキリストだけが神さまを見た」

という。この霊的な存在に対して——これは霊の世界ですから見えない——それでキリス



トは、

「父よ」

と言っている。なにか鬚ひげをはやしたお父さんを想像しているのではない。霊的な実在者を「父よ」と言った。仕方がないから、地上の言葉を使っているだけののはなしです。カトリックでは「マリヤ」とよく言うね。

「とにかくそこで会う人はお前の母だ、父だ、兄弟だ、姉妹だ」

とキリストは言ったでしょ、「愛せよ」と。みんな人助けをしなさいと。「愛する」ということは人助けをするということです。

9 恵福なるかな、平和ならしむる者、その人は神の子と称となえられん。

「平和ならしむる者」はまず平安でなければダメです。神・キリストと我との関係が立っていることを「平安」と言います。そういう縦の関係が立たないところには——横の関係が平和だから——横の平和はこの縦の関係の平安がなければできない。そうでない平和なんてものは偽りの平和です。偽りでなくてもすぐ消えてしまう。だから、一般の平和運動みたいなものはみな消えてしまう。消えたり、行き詰まったり、それたりして。

● 我は火を投ぜんために

キリストは「我は火を投ぜんために来れり」と言った。

ルカ伝12章49～51節、

「49 我は火を地に投ぜんとして来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何を望まん。50 されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。51 われ地に平和を与えんために来ると思ふか。われ汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり。」(ルカ12・49～51)

「天的なものと地的なものとの戦いだぞ」

ということですよ。この「火」というのは聖霊の火のことです。聖霊は水にも、火にも例えられる。キリストの言葉は非常に権威のあるところの力強い言葉です。絶対に意味ではない。これは凄い現実です。天国的現実です。

だから、我々は天国人なんです。キリストを生きている人、キリストと一つになっている人、これが天国人です。地上で既に天国を展開しながら生きています。

「なにかあの人は頼もしい人だなあ」

と人に思われる。それはそういう天国があるからです。

10 恵福なるかな、義のために責められたる者。天国はその人のものなり。

神の義です。この「義」というのは正義ではない。神さまの御意みこころが義なんです。道德の根底がこの義の世界です。義のために責められる。

私はあなた方とこの驚くべきキリストの言葉、聖書をこうやって一緒に学ぶのが何より



楽しい。私はあなた方に教えているのではない。一緒に楽しんでいただけのはなしです。教えるという意識は私にはありませんから。

幼稚園でも小学校でも中学でも、学校の先生はその子供たちと同じ次元において、そして、その子供たちの心の中に自分を入れて、そしてそこで霊界から来るところの力で語っていると、これは本ものです。そうすると、何かしらんけれども、子供たちが本当の力を得る、本当の喜びを得る。いわゆる先生ぶつたらダメです。人間味の豊かな深い人、そういう人がやはり魂と心にうつたえる。

11 我がために、人なんじらを罵り、また責め、詐りて各様の悪しきことを言うときは、汝ら幸福なり。12 喜び喜べ、天にて汝らの報は大なり。汝等より前にありし預言者等をも、斯く責めたりき。

13 汝らは地の塩なり、塩もし効力を失わば、何をもてか之に塩すべき。後
は用なし、外にすてられて人に踏まるのみ。

キリストという塩の元をちゃんといっていないと、塩でありえなくなってしまう。キリストは塩なんだ。

●キリストは光

14 汝らは世の光なり。山の上にある町は隠るることなし。

「光」といえばイザヤ書60章1～3節に、

「1 起きよ、光を發て、なんじの光きたり、エホバ（キリスト）の栄光なんじのうえに照出たればなり。2 視よ、くらきは地をおおい、闇はもろもろの民をおおわん。されどなんじのうえにはエホバ（キリスト）照出たまいて、その栄光なんじのうえに顕るべし。3 もろもろの国はなんじの光にゆき、もろもろの王はてり出るなんじが光輝にゆかん。」（イザヤ60・1～3）

とある。神さまの栄光がやってくると、お前は光だぞと。ここは「エホバ」を「キリスト」と置き換えて読む。キリストを受けとれば、お前は光だと。キリストは光ですからね。

光というのは太陽から来ている。自然界の光は太陽です。太陽がどこかへ行ってしまうたら、地球は真っ暗で、最後に地球は滅びてしまう。生きとし生けるものはみなダメになってしまう。だから、お天道さまを見て、本当にありがたいなと思う。日蓮がそうだったね。太平洋から昇ってくるころの朝日というものは素晴らしいものです。旭光という。日本の国旗は太陽の光。非常に単純な、世界で最高の国旗です。日本人はそのことを自覚しなければダメです。

「自分もあの太陽の光をいただいているから光だ」ということです。

どうも、そういう霊的な感覚でものを見ていないね。だから、ダメだよ。結局、福音を



受けとっていないと、学校の先生たちも正直、お気の毒です。

「聖書を読みなさい、福音書を読みなさい」

と、本当は言いたいんだ。日本は精神的に情けないね。仕方がない。我々がとにかくそれをやっていかなければ。

イザヤ書60章19～21節、

「¹⁹ 昼は日ふたたびなんじの光とならず、月も輝きてなんじを照さず、エホバ永遠になんじの光となり、なんじの神はなんじの栄となり給わん。²⁰ なんじの日はふたたび落す、なんじの月はかくることなかるべし。そはエホバ永遠になんじの光となり。汝のかなしみの日畢るべければなり。²¹ 汝の民はことごとく義者となりてとこしえに地を嗣がん。かれはわが植えたる樹株、わが手の工、わが栄光をあらわす者となるべし。」(イザヤ60・19～21)

神さまがお前さんの光だから、日も月も要らないんだと。キリストが永遠に我々の光となり、我々の悲痛の日は終わってしまう。やはり凄いな、この聖書の言葉は。こういう権威あるところの力強い言葉は旧約から新約まで貫いている。

「闇のうちに光がある」

と、中世の神秘家の言葉にある。

「闇が光だ、闇の中に本当の光が見えないか」

という。レンブラントの絵に、暗黒の中に一角から光が射している絵がある。一角から光が射しているこの光を尊びなさいというわけです。

●聖書ほど楽しい本はない

聖書というのはただ一つの書だ。「聖書」なんて言わなくて、「唯一書」と言ったらいい。比較を絶した本である。これは神の示しによったところの本です。神が本当の著者なんだ。旧約から新約にいたるまで、キリストの言葉が、旧約では隠れて、新約では顕になつて、隠れたるキリストの言葉(旧約聖書)、顕なるキリストの言葉(新約聖書)ということですよ。

聖書は大変な本だ。聖書ほど楽しい本はない。どんな本もかなわない。読んでいて楽しい力がきてしょうがないから楽しい。他の本だと、そういう力がやってこない。聖書を読んで、力を受けとらなかつたら、本当は読んでいないことにならない。

「これはどういう意味だ」

なんて言っているうちはダメです。

文語訳の聖書はなかなか素晴らしい。私は口語訳は読む気がしない。文語と口語と交ぜたような文体が本当はあつてもいい。

¹⁵ また人は灯火をともして升の下におかず、灯台の上におく。かくてともしびは家にあるすべての物を照らすなり。¹⁶ 斯くのごとく汝らの光を人の前に



かがやかせ。これ人の汝らが善き行為を見て、天にいます汝らの父を崇めんと為り。

と、率直に書いている。信仰ではない。信行です。私は若い時から散々

「信仰、信仰。しつかり信仰をもちなさい」

と言われてきた。耳にたこができてしまった。無教会主義は信仰一点張りダメです。行なんだ。キリストを受けとつて、自然に出てくる行為です。行為が証しなんだ。行為のないところに証しなんてない。身証、身をもつて証しするとはこの行為です。実際に我々が口で、また手足で、言ったり行なったりしていることが身証なんだ。身体で証している。本当のクリスチャンは身証者なんだ。身体で証しする者。証しができないで、いわゆる

「信仰、信仰」

と言っているのはひとつも本当のクリスチャンではない。偽りとは言いませんけれども、観念です。それではダメなんだ。

●完全性がそこにあるか

また、素晴らしい言葉があるね。

「43 「なんじの隣を愛し、なんじの仇を憎むべし」と云えることあるを汝等きけり。44 されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。45 これ天にいます汝らの父の子とならん為なり。天の父はその日を悪しき者のうえにも、善き者のうえにも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせ給うなり。46 なんじら己を愛する者を愛すとも何の報をか得べき、取税人も然するにあらずや。47 兄弟にのみ挨拶すとも何の勝ることある、異邦人も然するにあらずや。48 然らば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。」

「神さまが全きように、お前たちも全かれ」

と。これ以上の言葉がありますか。キリストは水を割らずに仰る。

「私を本当に受けとつてごらん。そうしたら、その全きが出てくるぞ」という。これは完全性です。どんなにそれがかけらでもいい。かけらであっても、そのかけらが完全性であるか、ということが問題なんです。我々のすることが為すことがどんなにかけらであっても、完全性がそこにあるかということが問題です。

このごろ夜、月が見えるね。月は、満月のときは少ない、大体は欠けている。欠けている月は欠けていながら完全を持っている。ちゃんと見えないうところを持っている。三日月で差し支えない。三日月に完全性がちゃんとある。

「地上の仕事はここで終わりました。まだ完成していません」

と。けれども、完成していなくても、完全性がそこにあればそれでいい。私の藤井先生は



『羔の婚姻』という詩を書いていた。この終わりはまだできていなかった。けれども、先生
のあの詩は完全性を持っている。

「汝らの天の父の全きが如く汝らも全かれ」

とは「完全性を持って」ということです。

「はい、キリストさま、あなたと一つになっているときに、私の中には完全性があ
ります」

と、あなた方ははつきりと答えなくては。

●キリストの勝利をいただく

片一方では、「現せ」と言っているかと思うと、今度は「現すな」と書いてある。

マタイ伝6章、

「^{おの}汝ら見られんために^{おの}己が義を人の前にて行わぬように心せよ。然らずば、

天にいます汝らの父より報を得じ。」(マタイ6:1)

そういう意識ではダメだ、無意識に現れているのが本当だ、いわゆる自我意識ではダメだ、
自ずからのところでなければいけない、というわけです。

聖書のキリストの言葉やパウロの言葉に取っ組んでくださいよ。取っ組んでその言葉に
圧倒されて倒されると、本当に起き上がる。意味を考える世界ではない、研究する世界で
はない。取っ組む世界なんです。取っ組んで負けると、本当に勝つ。負けると、キリスト
の勝利をいただくんです。

「いや、とてもできません、あなたにはかないません。」

けれども、あなたを私は受けとります、あなたの中に入ります」

と言う。そうすると、本当の勝利がやってくる。そういうのが本当の神交なんだ。絶対に
行き詰まらない。要するに、キリストと取っ組んで、キリストの中に入ってしまつて、

「私はあなたの中に入っているのではないですか」

と。それでいけば、必ず勝つていきます。キリストの勝利をいただくんだから。そういう
気持でやってください。そうしたら、楽しくてしょうがない。男でも女でも本当の勇まし
さと楽しさが出てくる。行き詰まりを知らないことになる。

私はあなた方とこうやって、聖書と取っ組んで日曜日の午前を過ごすのが大変楽しい。

「私はキリストと取っ組んでいる人間です」

という、本当の自覚をもって進んで行きましょう。

